

「雷が鳴った」

「重言」という言葉があります。「重なる」の字と、「言う」の字を書いて、「重言」です。意味は、「同じような意味の語句を重ねた言い方」ということです。例えば、「馬から落馬する」とか「頭痛が痛い」とか、そんな感じの言い方のことです。「いま現在」とか「連日、寒い日が続いている」というのも、重言の一つと言えるでしょう。ただ、中には、慣用表現として定着しているものもあるので、重言の全てが不自然・不適切とは言い切れず。例えば、「最後の切り札」とか「危機感を感じる」とか「後になって後悔する」とか「あらかじめ予約しておく」とか、咄嗟に口をついて出てきそうな重言も、結構あるかと思います。日本語以外の言語に、この重言に相当するような表現があるのか、どうか、ちょっと分析ができず分かりませんが・・・、日本語の場合は漢字の音読み・訓読みの区別や、単語と熟語という違いも含めて、とても豊かな表現ができる一方で、重言という形になりやすい場合も、可能性としてはあり得ることも考慮に値しますし、またそのように考えられるかも知れないという認識の下で、まずは最初にそう認めることが、第一に重要かつ大きな要であると断言できると言えるでしょう。・・・重言をさらに何回も重ねると、なんだか、ちょっとテレビを騒がす政治家っぽく聴こえるのは、多分おそらく気のせいだと思います。

という、言葉遊びは、これくらいに致しまして、実は、今日の説教題も、重言かも知れない側面を持っています。今日の聖書箇所 29 節から取り上げたものですが、「雷が鳴った」。そもそも、「雷」という単語は、「神が鳴る」という理解から生まれた言葉です。古代の日本人は、空に走る稲光を見て、それから少し遅れて響く大きな音を聞いて、「あれは、神が鳴ったのだ」と理解しました。そして、この理解は、日本固有のものではなくて、ギリシャ神話ではゼウスという神が、ローマ神

話ではユピテルという神が、バラモン教ではインドラという神が、雷を司る神として伝承されてきました。なので、全部とは言い切れませんが、いくつかの宗教文化において「雷」それ自体が、神の声、神の鳴らした音という意味を持つわけです。だから、「雷が鳴った」という表現と言うのは、「神が鳴らした音が鳴った」という重言っぽい表現になるわけです。・・・まあ、そんな重言や雷に関する私の蘊蓄（うんちく）は、今日の説教で特に重要ではないのですが・・・。

ただ、大事なのは、ほかの宗教文化において、「雷」に過ぎない、「神が鳴った」に過ぎない、つまり、人との意思疎通を目的とした言葉ではなく、ただ大きく響く天からの威嚇、脅迫に過ぎないものが、キリスト教においては、「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう」という語り掛けとして、御言葉として、聖書に記されている、ということです。ゴロゴロと鳴るだけの騒がしくておっかない大音響の中に、実は、神様の御言葉が響いていたんだよ、という事実を、今日の聖書箇所は報告しているわけです。

「群衆は、これを聞いて、『雷が鳴った』と」、と今日の聖書箇所には書かれています。これは、多くの人にとって、神様とイエス様の会話は、「雷」のように聞こえたということです。もちろん、この聖書の証言をして、空に響く雷をすべて、神様の御言葉であると理解するのは、早合点であるし、やり過ぎかとは思いますが。でも、ちょっと感覚を広げて、日々の自然の中に響き渡る音に耳を澄ませて、神様の御言葉を聴こうとする信仰的態度は、間違っていないと思います。キリスト教にとって、音は大事です。主の御声は、山の木々の間に、浜辺の波音に、吹き抜ける風の中に、そして、もしかしたら雷の中に、響いている、かも知れない。そういう感性をキリスト教は持っています。

「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分

のもとへと引き寄せよう」。受難節を過ごす私たちは、聖書の御言葉に耳を傾けると同時に、日々時々、耳に届く、色々な自然の音にも気を留めてみたらどうでしょうか。その心がけは、聖書を読むとは、異なるものです。「わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに・・・」。律法を読むだけは知り得ない神様のことが、雷に乗って、風に乗って聞こえてくるかも知れない。神様のことが風に乗って聞こえてくるというのは、まさにペンテコステの出来事ではあります。それと同じことが、「イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうと」した、この聖書箇所場面においても実現しているということです。この当時の群衆が知り得ていた、旧約聖書の律法には書かれていなかった真実が、雷のように聞こえた音の中に込められていたという。

もう一つ、今日の聖書箇所において重要なのは、そんな雷のように聞こえた音が響き渡る前、イエス様は「心騒ぐ」と仰いました。そして、「父よ、わたしをこの時から救ってください」と。これは、イエス様の「弱音」なのでしょうか。確かに、これはイエス様の「弱音」です。イエス様は、元氣澆刺に十字架の道を歩まれたのではなく、十字架を恐れ、その道を歩むことを躊躇われ、しかし、「わたしはまさにこの時のために来たのだ」と御自身が、この地上へと遣わされた意味に立ち戻りつつ、「父よ、御名の栄光を現してください」と祈るのです。そして、このイエス様の恐れが伴う切実な祈りに対して、ある人たちには「雷が鳴った」ように聞こえた御言葉が響き渡ったということです。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう」という、神様の決意表明が雷のように響き渡った。しかし、もしかしたら、この時に響いた雷は、つまり、雷鳴は、神様の独り子である御子イエス・キリストが十字架に掛かることを嘆いて、その御心から飛び出した、神様の悲鳴、だったのかも知れません。神様も、決して喜び勇んで、イエス様の十字架を御計画になったわけじゃない、と私は思っています。主の十字架は、神様御自身のためでもなく、イエス様御自身の

ためでもなく、ただ「あなたがたのためだ」と。聞き取れる、聞き取れないに関わらず、意味が分かる、分からないに関わらず、主の御言葉に触れることを赦された私たちのために、神様は再び栄光を現してくださる。主の十字架を実現してくださる。最初で最後の犠牲の仔羊をもって、私たちの罪を永遠に覆ってくださる、神様とイエス様の嘆きと共に、ですね。

そうまでして、神様とイエス様に愛されているのが、私たちだということです。だから、最後 35 節、36 節にある、イエス様の御言葉は切実なのです。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。・・・光のあるうちに歩きなさい。・・・光のあるうちに、光を信じなさい」と。「光」とは言うまでもなく、イエス様のことです。イエス様は、愛する人々、愛する私たちの方を向いて、「どうか今のうちに、歩いて来てほしい。信じて欲しい」と願っておられるのです。

イエス様の弱音から始まり、神様の悲鳴が響き渡ることを経て、最後、示されたのは「光を信じなさい」という信仰への招きです。イエス様と神様が味わわれた恐れも痛みも、苦しみも悲しみも、すべては私たちが「光の子となるため」。祝福を受け、希望に照らされて、どんな暗闇にあっても、力強く、確信をもって歩んで行けるようになるためなのです。

主の十字架は、私たちにとっても悲しみの象徴です。けれど、本当に辛いのは、神様とイエス様の方なんですよね。私たちは、この十字架によって、命と信仰を守ってもらっている側です。そのことを心に留めつつ、今日から始まる 1 週間も、イエス様への感謝と、神様が示される希望を見上げて、共に歩んで参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も、私たちのために尊い安息日を備えてくださり、ありがとうございます。あなたは、その御心を苦しめてまで、大切な独り子である御子イエス・キリストに、十字架の道を歩まされました。そして、イエス様も、あなたの御心と御計画から目を背けることなく、従順にその荆の道を歩まれました。そんな、あなたとイエス様のお姿を知り、私たちは謹んで「光の子」として招かれ

ていることを受け入れたいと思います。私たちのために実現した赦しと救いの十字架を受け入れて、あなたと共に歩む者とならせてください。そして、死を死で終わらせず、悲しみのさらに先をご用意くださっているあなたに全幅の信頼を置きつつ、この1週間も歩むことができますように、どうか導いてください。

このお祈りを、私たちの贖いの主であるイエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。